

大杉栄の社会思想の特質と意義

小山 仁 示

ま え が き

第二次大戦後、日本近代における社会運動とその思想の研究が自由になったとはいえ、マルクス主義・共産主義の系統のみが重視されて、自由主義・アナキズム・労資協調主義・社会民主主義・国家主義などの系統の研究が非常にうすくて弱いという状態がながく続いた。近代社会思想というものを、現実の社会問題についての全体としての認識や批判から、資本主義社会そのものの改革や変革についての思想、さらには近代社会の発展構造についての法的把握から、実際の社会運動や階級運動の指導の体系までをも含むと考えた場合、マルクス主義・共産主義の流れだけを正統視し重視するという方法は、わが国におけるこの分野の研究が、真の意味で学問的・科学的たりえていなかったことを証明する以外のなものでもない。

ここ数年來、右にのべたようなあやまれる社会思想史研究の態度は、ただされはじめてきている。アナキズムの系統についていえば、秋山清『日本の反逆思想』（現代思潮社、一九六〇年）のごときすぐれた通史的敘述が著わされたし、『近代思想』の地六社版による全号復刻、『新版大杉栄全集』全一四卷（現代思潮社）の刊行とその巻末に付せられた解説をはじめ、幾人かの研究者によって資料発掘と鋭い分析がおこなわれつつある。近藤憲二『一無政府主義者の回想』（平凡社、一九六五年）も、運動当事者の証言として、まことに貴重である。これらのことは、第一次世界大戦後

の、諸種の社会思想がわが国ではなやかに開花した時期にあって、大杉栄に指導されるアナキズム、アナルコ・サンジカリズムが大流行し、労働運動の分野でサンジカリズム全盛期を現出した時代があったことを考えあわせるとき、まことに有意義なこととされねばならない。その思想の当否とか、個人的な好悪の感情をのりこえて、私たちは歴史の事実を事実として正確にとらえて研究しなければならない。研究者の世界観や政治的立場によって、社会運動史や思想史の分析がゆがめられたり、事実を無視・抹殺する傾向が現在でも一部にはみられるが、このようなことでは、この分野はいつまでたつても学問としての市民権はあたえられない。かかる意味で、大杉栄の社会思想に正しい歴史的位置づけをおこなう作業も、ひろい意味の社会運動思想史の解明と研究にとって欠かせないことである。

最近私は、『講座日本社会思想史』第二巻（考賀書店）を編集する機会をあたえられて、私自身にとっては未知のことの多い大正期の社会思想を全体的に通観することとなった。丁度そのとき、かつて私も共同執筆者の一人として参画した『日本近代社会思想史』（青木書店、一九五九年）における大杉栄の評価について、本学の谷沢永一助教授が痛烈かつ適切な批判をおこなっておられた事実を知った。谷沢氏は、『国文学・解釈と教材の研究』一九六二年四月号に掲載された「近代後期文芸思潮の展望」のなかで、「湯浅晃が岸本英太郎・小山弘健編『日本近代社会思想史』に、大杉が、多数者・衆愚にたいする少数者の指導と役割を強調した、と書いているのは、事実上背馳する暴論ではなからうか」と指摘しておられたのである。この指摘を私はまことに当然のことと理解し、うけいれることができたが、大杉栄の思想について考えをめぐらせていたときであつただけに、四年も前におこなわれた谷沢氏の批判が、私に新鮮ではげしい衝撃をあたえたことも事実であつた。

以下に述べるところは、谷沢氏による鋭くかつ正当な指摘を念頭におきつつ、大杉栄の思想が、実践運動指導に最大の有効性を発揮した第一次世界大戦後のサンジカリズム流行の一時期を素描したものである。まことに複雑な叙述ではあるが、大杉栄とその一派の再評価を私なりにこころみだ第一歩であるという意図をくんでもらえればさいわいである。

サンジカリズムの流行

社会主義運動にとって「冬の時代」であった期間、第二インター正統派マルクス主義者をもって任じていた塚利彦とそのグループは、もっぱら「時機を待つ」方針をとっていた。この態度にあきたらなかつたアナキスト大杉栄は、はじめ荒畑寒村らとともに、社会主義復活の機運をつくりだす努力を開始した。やがて、第一次世界大戦が勃発して大量の工業労働者が創出され、大正デモクラシーの風潮を背景に、ロシア革命や米騒動を経験して、労働者階級の意識も運動も急激に進展した。この間、アナキストたちは、大杉栄・渡辺政太郎・久板卯之助らを中心に、着実な方法で労働者への啓蒙宣伝活動をつづけていた。

マルクス主義者塚利彦らに比して、はるかにすぐれた活動ぶりをこの期間に展開したアナキストたちには、大逆事件でもろくも壊滅した明治期社会主義の運動形態への、正当で深刻な反省があつた。それは、一九二〇年末にかかれた大杉栄の「日本における最近の労働運動と社会主義運動」(未定稿)に、はっきりと示されている。かれはいう——「戦後の労働運動の勃興」が「何人にも予想された」ときにあつて、「日本の社会主義者等は、かつて日清戦争後に片山等が辿つた道に帰つて、労働者の間の伝道と組織とに専心するの必要を痛感した」と(『大杉栄全集』第六巻、一九六四年一月、現代思潮社発行、七二ページ)。

その思想においてでなく、大衆的結合への志向と方法において、大杉らアナキストは、こうして明治期社会主義における幸徳秋水的方法から、完全に脱却してしたのである。片山潜の道に帰ろう、ということばで象徴されたかれらの大衆的結合への熱求が、米騒動と原内閣成立後のあたらしい社会情勢のもとで、労働者の大衆的組織運動への強烈な行動意欲となつて結晶していった。この点では、伝統的な明治型の大衆からの孤立化傾向を脱することのおそかつた堺・山川派が、行動的に大杉らの進出にたちおくれたのは、当然といえよう。大衆的結合への志向と方法で、明治の幸徳派の高踏的態度とは質のちがつた水準に早期にたちえたからこそ、大杉らは、一九一九—二三年のあいだ、「サ

ンジカリズム全盛期」として一時期を画し、運動の主導権をにぎりえたのであった。

とくに、明治以来の組合組織の伝統をもつ印刷工とアナキストの交流は古く、かつ深かった。一九一八年（大正七年）一月、それまでの「欧文植字工組合信友会」が発展して、全印刷工を組織対象とした横断組合「印刷工組合信友会」（当初は印刷従業員組合信友会）が発足し、これは友愛会につぐ有力な組合に成長した。大杉自身が、印刷工と直接的な関係をもつのは一九一九年ごろからであるが、信友会の組織運営や指導理念は友愛会と異なり、かなり早くから、のちにいうところの「自由連合主義」的性格をおびていた。

また、一九一九年六月に結成された「革新会」が東京の一五の新聞社製版工を組織し、七月から八月にかけての大争議をへて、一二月には「新聞工組合正進会」として再出発した。この正進会には、アナキスト団体たる北風会の影響力がつよく、その後、ふたたび、みたび新聞資本家にたたかいをいどんだ（水沼辰夫「大杉栄と労働運動」（下）、『自由思想』四号、一九六一年二月）。

一九二〇年（大正九年）の春にはじまる戦後反動恐慌を転回点として、普通選挙運動・組合運動への当局の圧力が激しくなるにつれて、労働運動のなかには、大杉派の思想が強くいこみだした。直接行動第一・議会行動否定・政治運動排撃・ゼネストによる現在政治の廃棄——これらのスローガンは、アナキズム系の信友会・正進会などにかぎらず、総同盟友愛会のなかにまでくいこみ、全国的にその風潮をひろげていった。一九二〇年五月二日のわが国最初のメーデーデモを発起推進したのは、正進・信友の印刷工であり、このメーデーを契機として、五月一六日には、友愛・信友・正進をはじめとする諸組合がくわわって、東京に労働組合同盟会がつくられた。

こうして、明治末期の幸徳派以来、思想運動のわくを出ることのできなかつたアナキズムが、「冬の時代」を通じての大杉らの大衆的結合への熱求が結実して、労働運動の実際の指導をにないうるにいたった。はじめてわが国に、アナルコ・サンジカリズムの現実的な組織なり、運動なりがあらわれたのであった。以後、一九二二年・二三年へかけて、サンジカリズム全盛期といわれ、総同盟内部にまで、普通選挙反対・直接行動礼賛の思想がひろがっていったわ

けだが、その思想には、アナルコ系からイギリス・アメリカ流の産業別組合主義、さらにはきわめて素朴な「労働組合主義」にいたるまでのさまざまな傾向がふくまれており、それだけでなく、それらがいろんなかたちで混合し、運動の当事者自身にも、明確な思想的自覚のなかった場合が多いと思われる。これらあらゆる雑多な傾向を総称しての「サンジカリズム」の全盛期にあって、大杉栄を思想的中心とするアナキスト派の理論的影響をうけたアナルコ系組合が、主導権をにぎっていたのであった。

知識階級排斥論

当時のアナキスト系組織としては、渡辺政太郎の主宰する労働問題研究会（一九二四年成立）と有吉三吉の催していた労働問題座談会（一九一六年成立）があった。前者には、信友会員ら労働者が参加して、一九一九年ごろには労働運動の青年闘士養成所の観を呈していた。後者は、サンジカリズム研究会の後身ともいべきもので、一八年一月以降、大杉栄はこの方に多く力を入れて出席し、労働者の自発的活動を促した。

大杉自身は、一九一八年一月に亀戸の労働者街に転居し、和田久太郎・久板卯之助と同居した。それは、「労働者町に住みたい。そしてなるべく長屋生活のお仲間入りをしたい」という、かれの「随分久しい前からの願い」の実現であった（大杉「小紳士的感情」、『文明批評』一九一八年二号）。ただちに、大杉は、和田・久板をたすけて純労働者向きの、月刊『労働新聞』を創刊するとともに、前述の労働者ばかりの集りである労働問題座談会に出席し、サンジカリズムやアナキズムについて熱心に説いたのであった。『労働新聞』は、座談会に集まった人たちにたすけられて諸方に配布されたが、その署名人であった和田と久板が投獄され、七月号限りで廃刊した。

労働問題座談会と労働問題研究会は、一九一八年一二月に合併し、北風会となった。これは、この年六月死去した渡辺政太郎の号北風によるものである。その後ますます会は発展し、北風会で育った青年労働者たちは、東京での労働運動の主軸となり、サンジカリズム全盛に大きな役割を果たした。会は、翌一九一九年八月に東京労働運動同盟会と

改称し、一九二〇年末まで存続したが、後々まで北風会の名で親しまれた。

この「北風会」の時期、大杉は「知識階級排斥」を唱導し、かれのまわりに集まってきた革命的労働者たちを感奮せしめ、インテリ分子には衝撃をあたえた。大杉によれば、知識階級出身の労働運動指導者は、「その理想に従って労働者の運動を指導したがる。そしてこの理想家等はお互いの間の少々の意見の相違から、終始なにやかやといがみあい吠えあっていて、そのけち臭い争いの種を労働者の間にまでも移し植えようとする」が、そのようにして押売りされる理想には、「かえって労働者にとって不利益な多くのまじり物がある」のであって、これは迷惑至極というわけであった（大杉「知識階級に与う」、『労働運動』一次三号、一九二〇年一月）。そこには、第一次大戦期をつうじてわが国に導入された諸種の社会思想をになつて大衆指導にのりだしたインテリ分子の指導者意識への痛烈な批判が含まれている。民主主義者・労資協調主義者、そして堺・山川らのマルクス主義者につきまとつた「上からの指導」という発想を、大杉は非難してやまなかつた。

知識階級が労働運動に加わることはなんら差支えないのだが、「労働運動の主体はやはり労働者でなければならぬ」と強調して、大杉はいう、「労働運動は、その精神において、労働者の一切の能力・人格の獲得運動である。労働運動に加わらんとする知識階級は、何よりもまず、労働運動のこの本質に徹底していなければならない。そして知識階級そのものの歴史的任務が権力階級の擁護であり、被圧制階級の欺瞞であつたことの反省と、こんどこそは被圧制階級の真実の友達になるのだという新しい覚悟とに徹底していなければならない」と（「知識階級に与う」、前出）。

このような大杉の考え方には、典型的なインテリ分子たるかれ自身が、日露戦争中の平民社の運動に投じて以来、「冬の時代」の『近代思想』の時期を経て、「片山的方法」にたちかえることの重要性に気づいて、明治以来の日本の社会主義運動の高踏的方法を完全に脱却しえた地点に到達したという、社会運動思想としては群をぬいた質的水準の高さがみられる。あるときには運動のたかまりに感激して、労働者のなかにとびこんで理論を上から注入しようとし、あるときには運動の退潮に悲観して、労働者の意識の低さをなげく、といったような進歩的知識分子の動揺性、さら

にはみずからのイデオロギーで運動を思う方向に指導しようとする指導者意識、こういったものを片鱗でも残しているような知識分子は、労働者にとって、有害無益と大杉は考えた。「愚痴やうぬぼれ」は、知識階級出身指導者の「反省と覚悟との不徹底からくる」という、かれの言葉のなかには、明治以来の革命運動を渦中の人として、経験し運動を真に大衆のものとするための方向を真剣に模索したうえで、運動のあり方、とくにそのなかでのインテリ分子のあり方についての、おそらくみずからの身を切る思いでなしとげた本当の意味での自己批判の重みが含まれていた、と考えてよいだろう。その意味では、大杉の思想は「多数者・衆愚にたいする少数者・知識分子の指導と役割の強調」（湯浅晃）というが如き、日本社会運動の伝統的痛弊とまったく無縁の域に達しており、特筆されるべきことである。

新秩序の創造

大杉栄が、近藤憲二・和田久太郎と相はかり、伊藤野枝・久板卯之助・村木源次郎・中村還一らの協力を得て、月刊新聞『労働運動』を出しはじめたのは一九一九年（大正八年）一〇月であった。吉川守邦・服部浜次らは外から経済的に援助をし、堺利彦・山川均・荒畑寒村らも寄稿した。これを第一次『労働運動』とよび、翌一九二〇年六月の第六号まで継続した。その方針は、創刊号のべているように、「日本のあらゆる方面における労働運動の理論と実際との忠実な紹介、およびその内容批評」であって、そこには「僕独自の多少の臭味」すなわちアナルコ・サンジカリズムの立場からの主張があらわれる、というのであった。

労働運動社の影響は、関東の各労働組合におよぶとともに、大阪・名古屋・京都・神戸には支局が設置され、出張所などもできて、京阪神の労組にも地盤をすたいに拡大した。大杉らの永年の努力が滲透して労働者の自覚がふかまり、「労働者の解放は労働者自らの手で成就しなければならぬ」という自主的労働運動に賛同する戦闘的な労働者が急速に結集されていったのである。それとともに、すでにのべた大杉の知識階級排斥論が労働運動内部にはいりこみ、労資協調的あるいは理想主義的指導をけおとして、経済的直捷行動の立場にたつアナルコ・サンジカリズムの全

盛期をもたらしたのであった。

しかし、このような風潮のなかでも、大杉の思想態度は、決してうわずったものとはならず、慎重そのものだった。一九二〇年の不況のおとずれをもって、政府・資本家と労働者側のどちらに益する結果をまねくかは不明であるとし、不景気は失業という「労働問題の一大難関である」し、「好景気の下での労働運動と不景気の下での労働運動とはよほど違う」と警告して、「労働者はいやが応でもますます真剣にならざるを得ない。その真剣がどんなふうにして現れるか。過去の経験がどれだけそこに生きるか。それは今後の事実に見るほかない」とのべた（『労働運動の転機』、『労働運動』一次三号、二〇年四月）。同じ論文のなかで、大杉は、一九一九年来の労働運動の勃興を一般経済界の好景気に乗じたものとみなし、労働運動が「浮薄軽調」「あまりに無作法で、つい、いい気になってしまふ」ありさまだったと批判した。かれは、サンジカリズムの流行というものの、それが外面的なものにすぎなくて、運動内部の脆弱な実体をみぬいていたのである。だから、すでにそこに労働運動の一転機がきざしていて、そこへプラスするに不況という一大難関がおそってきたと、大杉は情勢把握をして、「もっとも活動力のある労働者の心的状態」つまり「真剣さ」に期待をよせたのであった。

このような大杉の考え方にも、かれの社会思想の特質がよくあらわれている。そこには「真理は既にわが手にあり」とする独善はみられない。労働運動の将来、ひいては人間社会の未来への軽々しい予測も拒絶され、自己のみが歴史の決定者だとする傲慢もない。そして、現実の生活の渦のなかを、苦闘をかさねて生きていく労働者の「心的状態」|| 情感のなかにこそ、生きた思想が結実し、そのエネルギーが社会変革をもたらす、というのが大杉の考え方であった。

アナキスト大杉栄は、こうして、人間個人個人の考え方の内面的革命をつうじて、はじめて社会革命がなしとげられるという立場をとった。「労働者の自主自治の自由なる発達」をさまたげるものは、すべてこれを排撃する、労資協調的・社会改良の方針を徹底的に憎悪する、というかれの態度は、労働者の精神の内面的変革こそ革命への道とす

る考え方の当然の帰結であったわけである。だから、革命も、労働者が政権をにぎる遠い将来にすべてを期するのではなく、現実の運動そのものなかに未来のイメージを可能な限り精神的に時々刻々に実現されていかねばならぬものと考えていた。かれはいった——、「旧い社会の中に、旧い国家の中に、自然に新しい社会、新しい国家が成長して行く。自然に社会の改造・国家の改造が行われて行く」と（徹底社会政策）、「労働運動」一次二号、一九年一月）。

大杉の影響下の北風会系のメンバーが、進歩的知識人や労働運動家の演説会を、かたっぱしからやじりたおしてまわった、というこの時期のアナキストたちの動きも、「人間の長話を黙って聞いている」のは服従関係を意味し、「同じ階級の人の間では、長せりふがなくなって、短かい対話が続く」という考え方から「発意と同意との自由」をつくりだすための行動であった。「到るところに自由発意と自由合意とを発揮して、それで始めて現実の上に新しい生活が一步一步築かれて行くんだ」（『新秩序の創造』、『労働運動』一次六号、二〇年六月）とする大杉によれば、現実とは可塑的であり、自由な人間関係ないし全的人間関係の樹立＝人間の解放は「新しい生活の一步一步の中に」めばえていくべきだったのである。

自由連合主義

「自由連合」ということばが、一般的に使用されるようになったのは一九二二年の総連合大会前後と考えてよく、「自由連合主義」という名称が団体の綱領に明示されたのは一九二六年の全国労働組合自由連合会のそれがはじめてである。

それまでは、すでにのべたように、労働者の「自主性」「自主自治」を強調するのが、大杉榮らアナキストの特徴であった。ただアナキズムとひとくちにいっても、その思想内容にはさまざまの傾向がふくまれており、非常に幅の広い形でとらえねばならぬことも前述のとおりである。したがって、幾多の形態であらわれるアナキズム系ないしはサンジカリズム系の運動を、それらに共通する組織論の上での「反中央集権主義」つまり「自由連合主義」という理

念によって総括して考察するという、小松隆二氏らの研究方法は当を得たものである（『大正・昭和初期における自由連合主義労働運動と機関紙誌』、『労働運動史研究』三三号、一九六二年九月）。

自由連合主義とは、運動上の組織や実行において、合同主義・中央集権主義に対立する考えで、アナキズムを母体にし、サンシカリズムによりどこをもとめるものである。大杉らによれば、労働者の団体は、上から下にでなく、下から上に組織された。かれらのもっとも重んずるのは、個人の発意心であった。同一職業・同一工場の労働者の発意によって、「センデイカ」すなわち労働組合が発達し、これが社会組織の一単位となる。この小労働組合は、同一職業の関係で結びついて「労働組合全国同盟」をつくり、同一地域の各職業が結びついて「労働組合地方同盟」がつけられ、この二つが相合して「C・G・T」すなわち労働総同盟を組織する。そして、これらすべての組織は自治をおこなうのである。したがって、このサンシカリズムは、既存の政治制度と経済制度を根底から否認し、アナキストと一致して「共産と連合」のあたらしい社会をつくることを目標とする。

だから、自由連合主義は、組織の土台たる個人や地域の自主自治を基礎とするものであり、「労働組合は、それ自身が労働者の自主自治的能力のますます充実して行こうとする表現であり、外に對してのその能力のますます拡大して行こうとする機関であり、そして同時にまた、かくして労働者が自ら創り出して行こうとする将来社会の一萌芽でなければならぬ」（『労働運動の精神』、『労働運動』一次一号、一九一九年一〇月）。その理論は、労働運動を「人格運動」「労働者の自己獲得運動」「自主自治的生活獲得運動」としてとらえて、当然、議会議主義を否定した経済闘争中心の階級闘争の観点にたっている。しかもそこには、現実の資本主義社会を分析し、変革する経済理論のもちあわせはないという、皮肉な矛盾があった。自由連合派が、結局は「本能」とか「真剣さ」とか「理論より実行」という抽象的・心情的訴えで終始するという致命的欠陥によって、やがては、世界觀的完結性をもつ「ボルシェビキ派」に敗北する原因もここにあった。

しかし、現実の社会構造を「生の拡充は殆んど杜絶せられ」て、自我の自由なる発展が阻止された状態としてとら

えていたことは、二〇世紀後半の現在の社会（資本主義社会・社会主義社会のいずれをとわず）で大きな問題となっている人間疎外の回復、人間性の回復をすでに早くも労働運動にもとめていたという先見性を物語っている。この意味で、大杉栄の思想と、それに影響された自由連合主義は、あらためて今日的評価をあたえられるべきであろう。

お わ り に

一九二二年九月三〇日の大阪天王寺公会堂における日本労働組合総連合の結成大会が、組織問題をめぐって、大杉栄らアナルコ・サンジカリズム系と、堺利彦・山川均・荒畑寒村らボルシェビキ派が激突した結果、総連合運動そのものが挫折したことは事実である。しかし、この事件をもって労働運動指導の思想としてはボルシェビズムが勝利した「画期的事件」と評価することのあやまりは、すでに指摘されているところである（秋山清「大杉栄とアナボル論争」、『近代日本を創った百人』上巻所収、毎日新聞社刊、一九六五年。白井泰四郎「アナ・ボル論争考」、『大河内一男先生選歴記念論文集第Ⅱ集・労働経済と労働運動』所収、有斐閣刊、一九六六年）。

この総連合の失敗には、根本的に両派をつうじて、労働組合という日常闘争の機関にイデオロギーの問題を直接にもちこむというあやまちと、労働組合組織論の問題をちがった組織論のうえにたつ組織間の統一戦線の問題と混同するというあやまりが、一貫して作用していた。表面で対立抗争した組合代表は、必ずしもアナキストではなく、また必ずしもボルシェビキではなかった。しかし、堺・山川らのマルキシスト一派は、当時の総同盟を、その合同主義による中央集権団体として補強し、サンジカリズムの組合運動への影響力をぬぐいさろうと意図していた。大杉らアナキスト一派は、あくまでも自由連合主義による労組組織を全国的に確立し、総同盟を足場にしていくというとするボル派を排斥しようとしたのであった。したがって、総連合大会での論争は、労働組合運動そのものあり方とは無縁の、現実から遊離した抽象的な組織原則論の対決としてあらわれ、総連合運動は、たとえ警察の解散命令がなくとも、

不毛のうちに流産せざるをえないものであった。総連合運動における「アナ・ボル対立」「アナ・ボル論争」は、二重にも三重にも、奇妙な非生産的なものであった。そして、アナ派・サンジカリズム勢力を凋落させたのは、日本資本主義の、とくに大企業において労働者の子飼ひ養成的労務管理・年功序列型賃金体系をうちたてる方向が進展していったのが大きな要因であり、そこへ総連合運動挫折一年後の震災テロルが外部からの決定的衝撃となったからであった。

全国総連合大会決裂後、自由連合派および同調者は、一層反マルクス主義の色彩を強くしていき、翌一九二三年八月末には、自由連合派の思想団体・労働団体・各地方の有志を結集して、全国組織をつくることを企図するにいたった（近藤憲二『無政府主義者の回想』二五六ページ）。しかし、これはその直後の関東大震災のため具体化できなかったばかりか、震災弾圧で最高の指導者大杉栄を殺害されたことは、大杉があまりにも卓越したアナキストであっただけに、ボル派のうけた以上の大打撃（共産党も瓦解した）をアナ派はこうむった。

すでに、第一次大戦後のわが国の資本主義生産の発展と変容は、労働市場の分断と封鎖性をうみだしていた（隅谷三喜男『日本労働運動史』一三二—一三五ページ参照、有信堂刊、一九六六年）。これは、労働組合組織としては、大企業中心に職業別から個別的な企業別組織の発生を促す作用としてはたらいた。自由連合をとるアナ派にとって、このような労働情勢は、その基盤が弱体化していくことを示し、反対に総同盟型の組織に有利であった。自由連合派を中心的にささえたのは、いぜんとして横断的な労働市場が残存していることが横断組合存立の基礎となった印刷工の組織だけの蠲を呈するようになり、全体として先細りとなっていたのは、日本資本主義の発展の特質からみて、やむをえない面があった。ボル派の復活・台頭に比して、全盛をきわめたアナ派の衰微はおおうべくもなかった。震災弾圧を大きな契機に、アナキスト陣営に自由連合派は運動の主流から脱落し、アナキズムないしアナルコ・サンジカリズムは、大杉の死とともに、わが国においてその後、ふたたび運動の主舞台に登場できるような強い影響力をもつことができずに現在にいたっているのである。